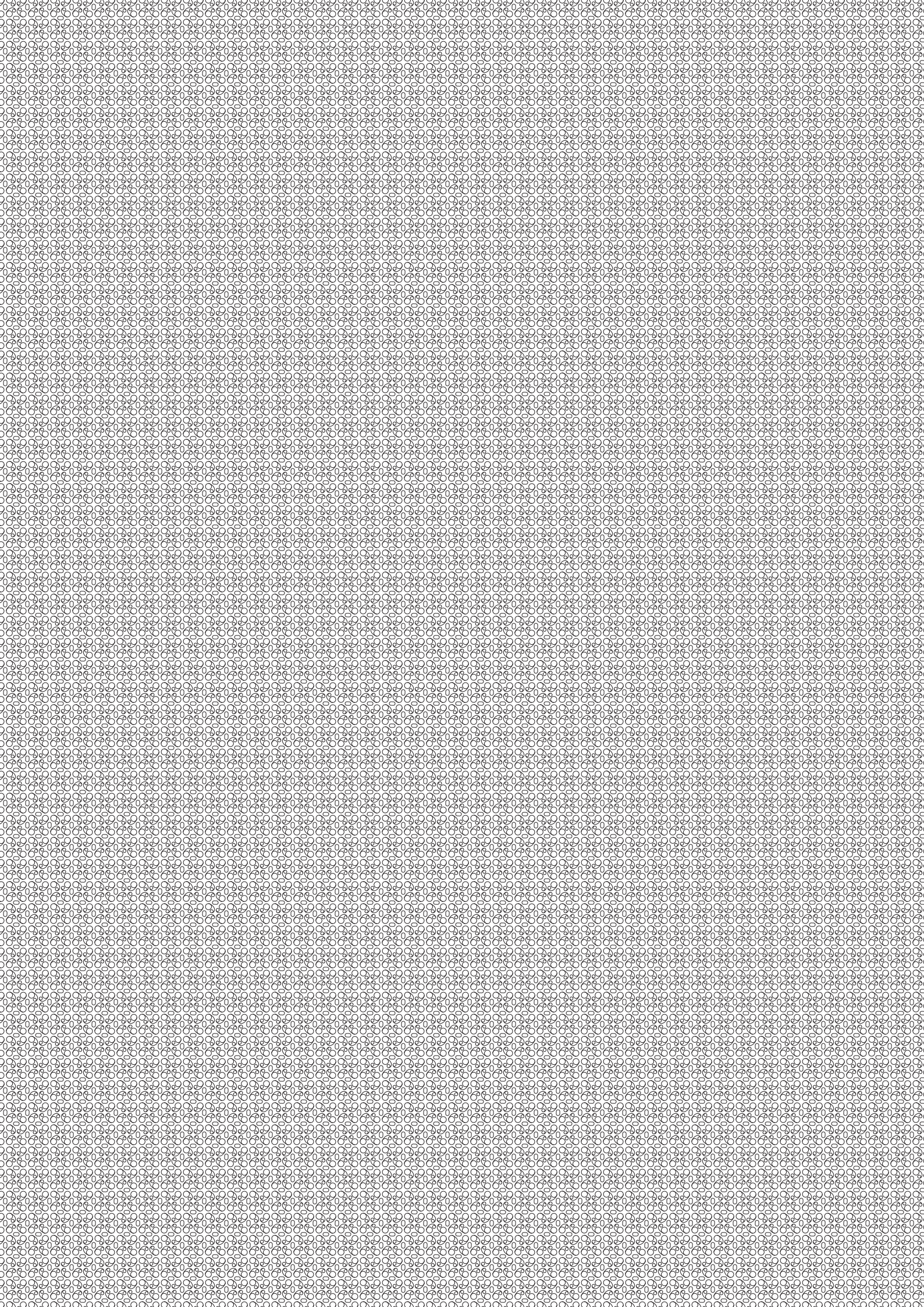


国語

注意

- 1 問題は **1** から **4** までで、16 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に HB 又は B の鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、や
。や「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。



1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書かいしよで書け。

- (1) 能の舞台には白い足袋たびを履はいて上がる。
- (2) 扇あふぎを手にして踊る姿はとても優雅だった。
- (3) 無敗の投手を擁擁するチームに立ち向かう。
- (4) 掌中てのひらの材料を自在自在に使つかって長編詩ながひんしを作り上げる。
- (5) 縦糸と横糸を組み合わせてきれいな布地ぬいを才さいる。
- (6) 手荷物を一時的一時にアズけて出かける。
- (7) 畑はたけの麦こむぎが一斉いっせいにシユツガシユツガを始めた。
- (8) この冬は、イチイセンシンイチイセンシン、創作そくさうに励むむ日々だった。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

大きな洋館やうくわんに家族かぞや親戚しんせき、飼い犬かいいんのジャックと共に暮くらしている佐智さちは、ひそかに物語ものがたりを書いたノートを机いしの上に置いて考えこんでいた。そのとき佐智は母ははに呼よばれ、洗濯物せんたくものを運はぶの手伝てつだった。

佐智は机いしの前に戻かえった。といっても、窓まどぎわのコーナーにある父親ちちのデスクなのだ。彼女かのじょ自身の勉強机べんきょういしを置く余裕よゆうはない。物語ものがたりを書いていることはだれにも告つげていなかった。書き終おわつてみると、急に胸むねの中なかが淋さびしくなっただけで、大したことのようには思おもわれなかった。彼女はノートノートの表紙ひたひらをななぜなぜなため息ためいきをついた。

〔学校の宿題？〕

〔でもないけれど、ちょっと……。〕

母親ははは独ひとりり言いのようように言いった。

〔三郎さぶろう叔父おじさんなら喜よろこんで読よんでくださるかもね。〕

〔え？〕

〔叔父おじさんは文学ぶんがくの先生せんせいよ。〕

〔でも……恥ずかしいよ。〕

〔引ひっこみ思案しあんがサチの欠点けってんね。〕と言うと、母親はははもう勝手かたにしなさいというふうふうに洗濯物せんたくものををごごししここすり始はじめた。

言いわれるままでもなく、内気うちげさがあらゆる物事ものごとの発展はつてんをはばむことに佐智さちは気がつく年齢ねんれいになつていた。しかし気づけば内気うちげさが消滅しょうめつするわけでもなく、内気うちげな人間にんげんにとつての苦くるしみがそこから始はじまることを母親ははは

理解していかないのだった。それに自分の書いた物語は、自分の指や髪や爪や唇と同じようなものだという気がした。だれにでもやたらにこれらをいじってもらいたくはない……。佐智はそう思いこもうとした。ところがおかしなことに、この気持に矛盾するような別な感情もむくむくと湧いてくるのだ。それは他人に読んでもらいたい、という欲求だった。だれかに自分を共有してもらいたい、という感情にひそかに通じるこのより強い衝動に忠実になると決心し、次の夜ノートとともに階下において三郎叔父の部屋の扉をたたいた。彼はドアを開け、予告なく姪が立っていたのでいくら驚いたようだった。でもいつもの穏やかな笑顔をつくって、彼はたずねた。

「どうした？ 何の用事？」その言葉に励まされるどころか、勇気を奪われて佐智は後じさりした。

「叔母さんは？」と霞のほうに用ありげにきいた。

「いないよ、芝居の稽古で毎晩遅いんだ。」

佐智は口ごもり、やはりこのノートは見せまい、と考え直した。自分が好きで書いた物語を、叔父に読んでもらう理由がどこにあるというのだろうか。

「じゃあ、また……。」とあわててドアを閉めかけると、今度は三郎叔父が姪を引きとめる番だった。

「ちよっとお待ち。ちよっと紅茶をいれるところだから、お入りよ。」

佐智はおずおずと部屋の中に入った。壁紙が見えないほどの書物の行列をうらやましそうに眺めた。積み重ねられている書物の数は一年前の倍ほどに達していた。この部屋に最初に来たときに佐智の心を奪ったベッドや

家具は、けっして古ぼけたわけではないのに光彩を放たなくなっていた。三郎叔父は姪の様子を見て口を開いた。

「読みたいものがあつたら貸してあげるよ。」

「うん。でもまだあたしには難しそうな本ばかりだわ。」と佐智は愛読書である例のシリーズ物を思い浮かべて、少し赤くなった。

「そうかもしれない。」と劇作家はうなずいた。

「でも高校生になったら、これだけはぜひ読んだよ。」

三郎叔父は書棚から一冊の本を引き抜くと、佐智に見せた。

「オンディーヌ。これ、人の名前？」

「水の妖精の名前でね、J・Gというフランスの劇詩人の作品なんだ。」

「J・G……。」と佐智はその聞き慣れぬ名を頭に刻みつけようと声を出してつぶやいた。「劇詩人って、どういう人？」

「劇詩人は、詩を戯曲で書ける人だ。J・Gはその希有な才能に恵まれていたんだよ。」と三郎叔父は、好きなものを相手に分け与えたい衝動に駆られたように、うっとりと言った。それから夢から覚めたように佐智を見て、彼女が抱えているノートを指してたずねた。

「そこに何を持ってきたの？」

「あたしの……書いた……。」

佐智は消えいりそうな声で言った。熱っぽく語られたJ・Gの話のあとではますます気がくじけていた。

「ほう、貸してごらん。」

彼は真っ赤に染まった姪の顔には気づかぬそぶりでもノートを取りあげると、パラパラとページをめくった。佐智はそれを取り返そうと焦った。

「あの……ちよつとだけ叔父さんに読んでもらおうと思ったの……でも別に……。」

「ほう。」と彼はもう一度楽しそうに言った。

「サッチャンが書いたのか。二、三日借りておいていいだろうね。そのほうがゆつくり読めるからね。」

それから彼は紅茶がさめぬうちに早くおあがり、と姪をうながした。

数日後、登校しようとして靴をはいていた佐智の背中に、扉を半開きにして顔を出した三郎叔父が話しかけた。

「手風琴と男の子の話は面白かったよ。少し直せば使えると思うなあ。」

もう二つ三つ書いて叔父さんに見せてごらん。ホン屋に頼んであげよう。」

(2) 一日中、胸の中にしまいこんだ秘密が、外にもれやしまいかとびびくし、友だちになぜそんな怖い顔をしているの、とたずねられる始末だった。

「サチはいったい何をぼうつと考えているんだい？」と父親がたずねた。「夢みる年ごろなのでしよう。」と母親が言った。

佐智はまた鉛筆を握りしめて書きはじめた。夢中になりすぎると、粗悪な鉛筆の芯はすぐ折れた。あまり鉛筆が減るので母親はまずい顔をしたが、口には出さなかった。彼女が自分を認めてくれていることを感じて、佐智は元気を取り戻した。今度は暴風雨の吹きすさぶ海の上の引揚船の話を書いた。もう一つは登校途中で見かけた水たまりの話だった。そのとき水たまりは、底なしの穴のように思われたのだった。短い二つ

の物語を佐智は今度は期待をこめて三郎叔父に渡した。彼はごほご咳をしながら、それを受けとった。目が落ちくぼみ、額に深いしわが寄っていた。机の上に広げられたままの原稿用紙が一字も埋まっていなかった。佐智はちらりと見とどけた。佐智は三郎叔父の仕事を邪魔したことを知ったが、自分のことにいっぱい詮言をいう余裕がなかった。しかしその後、彼は姪のつくった物語には全然触れなかった。きつとよい出来ではなかったんだ、と佐智は落胆した。だから忘れられてしまったんだ。(3) 一時的に切り開かれた霧のカーテンがふたたび縫いあわされ、佐智は元どおりのダークブルー少女となった。内心をだれにも打ちあけず、他人をゆきずりの人間と考えるくせがいつのまにかついていた。

まったく突然に、佐智宛に児童向き文芸雑誌が送られてきた。目次を開くと、真ん中ごろに自分の名前が出ていた。とても大きくて黒々とした活字だった。手が震えるので何度も失敗したあとで、やっとそのページを見つけた。三郎叔父に渡した物語の一つが、まるで自分の作品ではないような顔をして載っていた。終りに国語の教科書で佐智も知っている小説家のK氏が感想を書いていた。

『素直な感受性』『しかし美文調の飾りがめだちます。』

佐智は考えこむひまもなく、階下に駆けおりて三郎叔父の部屋をノックした。

「そうかい、Kさんが選んでくれたんだね。それはよかったね。でももう一つのほう……あの底なしの水たまりの話、あれはどうしたんだらうね。」と彼は何度も言い、首をかしげた。佐智にしてみれば、二つのうち一つでも載せてくれたことだけで十分なのに、三郎叔父は自分が気に

入った作品が選ばれなかったことに不満を抱いたようだった。それでも彼の祝福は彼女の喜びを倍加させた。佐智は二階に駆けもどり、迷惑そうにジャックの両手を握ってフォークダンスを踊った。それから肘かけ椅子に深々と身体を沈めると、うっとりとして自分の書いた物語を再読しはじめた。半ばまで来たとき、舞いあがった気持がそのままの勢いで落下するのを感じた。書き手のときには熱にうかされていた物語は、読み手になってみると空疎で白々しかった。赤い本の古風な物語のどれ一つにも及ばぬくらい退屈だった。『美文調の飾り』。最後のとどめのようにこの言葉が佐智を刺し貫ぬいた。矢尻に逆だった刻みがあるように、食いこんだらもう抜けなかった。指摘されるまでもなく佐智は、自分、〈美文調〉であることを十分に知っていた。そして文章はその自分から生まれるのだ。K⁽⁴⁾という人は何と怖い小説家なのだろう。

(加藤幸子「時の筏」による)

〔注〕 なせて——なでて。

霞——佐智の叔母の名前。

希有——非常にまれである様子。

手風琴——アコーディオン。

美文調——美しい語句で飾って書いた文章。

空疎——見せかけばかりで、中身がないこと。

赤い本——祖母の部屋に置いてあり、佐智が熱心に読んでいた本。

〔問1〕⁽¹⁾ その言葉に励まされるどころか、勇気を奪われて佐智は後じさりした。とあるが、このときの佐智の気持ちとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自分の内に秘めた悩みを誰かに知ってもらいたいという気持ちに正直になり、思い切って三郎叔父を訪ねたが、部屋の扉を開けたときの意外そうな声を聞いて消極的になっている。

イ 自分だけのために大切にしまっておいた物語を、母親に勧められてしぶしぶ三郎叔父に読んでもらうことにしたが、急に言葉を掛けられて叔父を訪ねたことを後悔している。

ウ 自分が書いた物語を三郎叔父に読んでもらおうと一度は決意して部屋を訪ねたものの、いざ本人の前に立って用事を聞かれると決意が揺らぎ、言い出すのをためらっている。

エ 自分が物語を書いていることを知っていた母親から矛盾する二つの感情を指摘され、迷った末に三郎叔父に相談しようと思ったが、思いがけず問い詰められておじけづいている。

〔問2〕⁽²⁾ 一日中、胸の中にしまいこんだ秘密が、外にもれやしまいかとびくびくし、友だちになぜそんな怖い顔をしているの、とたずねられる始末だった。とあるが、このときの佐智の様子を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 三郎叔父に物語の才能があると言われ、他の作品も書くように勧められたことを喜んだが、「ホン屋」については秘密のことなので、誰かに話したい気持ちを抑えて沈黙を守り続けている様子。

イ 三郎叔父に自分の物語を褒められ、「ホン屋」のことを言われて心に生じたひそかな思いが人に知られてしまうことを恐れ、表に出てしまわないようにと気をつけて表情が硬くなっている様子。

ウ 三郎叔父に自分の物語の面白さを認めてもらい、もっと書くようにと勧められたため、こっそりと早く書き上げて「ホン屋」に頼んでもらおうと思いい立ち、集中して構想を練っている様子。

エ 三郎叔父に見せた物語を少し直せば「ホン屋」に頼んであげると約束してもらったことは、まだ誰にも話せない秘密であり、友人を寄せ付けないためにあえてこわばった表情を見せている様子。

〔問3〕⁽³⁾ 一時的に切り開かれた霧のカーテンがふたたび縫いあわされ、佐智は元どおりのダークブルー少女となった。とあるが、このときの佐智の様子を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 三郎叔父と物語について話した後、新たな気持ちで物語を書き期待を込めて渡したが、仕事の邪魔をしたことを謝ることができなかった自分を恥じて、以前のように他人との交わりを控えようとする様子。

イ 三郎叔父に物語を褒められたことで自信が生まれ、期待を込めて新しい物語を渡したが、あまり良い出来ではなかったと評価されて深く傷付き、二度と誰にも物語を見せまいと強く心に決めている様子。

ウ 三郎叔父に勧められた題材で物語を書き、高い評価がもらえることを期待して渡したが、叔父に忘れられてしまうような出来だったことにながかりし、自分も書いたことを忘れようと決意した様子。

エ 三郎叔父とのやりとりの後、ひとときの希望が生まれていたが、期待を込めて渡した新しい物語について叔父から何の言葉もなかったために深く気落ちし、再び他人に対して心を閉ざってしまった様子。

〔問4〕⁽⁴⁾ Kという人は何と怖い小説家なのだろう。とあるが、佐智がどのように感じたわけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 書き手のときから薄々気付いていた物語の内容の乏しさを客観的に読んで改めて実感したが、Kに、立ち直ることができないほど物語の本質を鋭く言い当てられたと感じたから。

イ 初めて読み手の立場になり、自分の物語は人を魅了する力がないことを知ったが、物語を一度読んだだけのKにひとりよがりな孤独な自分の心を察知されたと感じたから。

ウ 冷静になって読んだときに初めて自分の物語に魅力を感じられないことに気付いたが、面識がないKに、物語を通して自分の内面の乏しさをも見抜かれたと感じたから。

エ 改めて読んでみると自分でもがっかりするほどの内容の薄い物語ではあるが、Kの感想は他人の作品に非常に批判的であり、人の心を気に留めない冷酷さがあると感じたから。

〔問5〕本文中の表現について述べたものとして適切なものを、次のうちから選べ。

A それに自分の書いた物語は、自分の指や髪や爪や唇と同じようなものだという気がした。は、佐智の書いた物語が単に紙に書かれたものではなく、身体の一部と同様に隠しておきたいものであり、決して

誰にも読ませたくないという強い気持ちを比喻を用いて表している。

B この部屋に最初に来たときに佐智の心を奪ったベッドや家具は、けっして古ぼけたわけではないのに光彩を放たなくなっていた。は、

ベッドや家具が光彩を放たなくなったという表現を用いて、佐智が以前強くひかれていたものへの興味を失ったことを表し、今は物語や書物の世界に心を奪われていることを浮かび上がらせている。

C 三郎叔父に渡した物語の一つが、まるで自分の作品ではないような顔をして載っていた。は、佐智が自分の書いた物語を他人のものであるかのように客観的に見て、審査員のような公平さで内容を批評していることを、人間でないものを人になぞらえる擬人法を用いること

で分かりやすく表している。

D 佐智は二階に駆けもどり、迷惑そうなジャックの両手を握ってフォークダンスを踊った。は、ジャックの様子と歓喜する佐智の様子

を対比的に表し、佐智が文芸雑誌に作品が掲載されたことよりも三郎叔父からの祝福に大きな喜びを感じていることを示している。

〔問6〕本文の内容や表現の特徴について述べたものとして適切なものを、次のうちから選べ。

A 本文は佐智が物語を三郎叔父に見せるまでと見せた後の大きく二つの場面に分けられ、どちらの場面でも物語を通して他者と関わること

によって様々に変化する佐智の心情を描いている。

B 本文が佐智の家族だけでなく親戚も一緒に住んでいるという設定で書かれることによって様々な人物の視点から物語が描かれ、視点が変化することによって場面の転換も示されている。

C 本文に佐智と様々な人物との会話文が多用されることによって物語がテンポ良く進み、佐智の心情が目まぐるしく移り変わりながら物語を肯定的に捉えるようになる様子を表している。

D 本文では佐智の心情や性格についての直接的な描写をせずに、「佐智は消えいりそうな声で言った」や「矢尻に逆だった刻みがあるように」などの比喻を用いて暗示的に示している。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

すでに「奇跡」はおきている。われわれはいま貨幣が「ある」世界のかなかに生きているのである。貨幣とは、一般化された交換の媒介として、欲望の二重の一致のないところでも商品と商品との交換を可能にする。どのように特殊な商品をもっているひとも、どのように特殊な商品を欲しているひとも、貨幣を媒介にすることによって商品交換の場に参加できることになる。まずじぶんの手元にある商品を欲しているひともさえ見つかれば、貨幣とひきかえにその商品を手わたすことができるはずであり、つぎにじぶんの欲している商品をもっているひともさえ見つかれば、貨幣とひきかえにその商品をもらいうけることができるはずである。

商品を手ばなして貨幣を手に入れることを一般には商品を「売る」といい、貨幣を手ばなして商品を手に入れることを一般には商品を「買う」という。商品と商品との交換が、貨幣の媒介によって、売りと買いとに分離される。ひとびとは売って買うようになるのであり、その結果として、手もとの不用品が本当に欲しい商品へと交換されることになるのである。

売りと買いの分離——それは、商品と商品とのあいだの直接的な交換の「困難」を回避し、商品世界を商品世界として成立させる。それは、マルクスの言葉を借りると、「社会的な物質代謝の局地的で原生的で、先祖伝来のつつしみぶかい、のんびりとして愚昧な諸制限を打ち破る」力をもつのである。しかし、それは同時に、その商品世界のなかに新た

なかたちの交換の「困難」——しかも今度は、次元の異なったふたつの形態の「困難」——をまねきよせることになる。商品は貨幣を恋慕い、貨幣は商品を恋慕う。だが、

まことの恋がなめらかに進んだためしはない。

（シェークスピア『真夏の夜の夢』。『資本論』に引用）

不幸なことに、売ることも買うことにも、それぞれ固有の交換の「困難」がまちうけているのである。

じつさい、いくら貨幣なるものが人類の記憶も定かではない太古の日常的な行いから超越したアイデアであるわけではない。それが歴史のなかで生まれたものであるならば、それは歴史のなかで病み、歴史のなかで死ぬ可能性をもつ。貨幣が貨幣であるためには、それは人間による日々の売り買いによって、たえず貨幣として確認され、たえず貨幣として更新されていかなければならない。貨幣は日々貨幣にならなければならないのである。〔奇跡〕は日々くりかえされなければならないのである。

売りから買い、買いから売りという循環運動が円滑にくりかえされているかぎり、ひとびとは、じぶんたちがそのなかで日々売り買いにはげんでいる商品世界の存在を自明なものとして疑うことはない。⁽¹⁾だが、この無限の循環運動のどこかに狂いが生じたとき、はじめてその存在の歴史性が意識されることになるのである。

売ることの困難とは、商品^①を貨幣に交換することの困難である。たんなるモノが価値ある商品となることの困難であるといつてもよいだろう。恐慌^②とは、ある日とつぜん商品世界全体が需要不足^③におちいり、すべての売り手が同時に売ることの困難に直面してしまう事態にほかならない。そして、その全般的な需要不足の状態がその後一定期間ひきつづくとき、それは一般に不況とよばれることになる。もちろん、マルクスのいう「過剰生産^④」とは、ここでいう全般的な需要不足の状態に対応している。

これにたいして、買うこと^⑤の困難とは、貨幣を商品に交換することの困難である。インフレ的熱狂^⑥とは、商品世界全体が需要過剰となり、まさにすべての買い手が買うこと^⑦の困難に直面している事態にほかならない。

しかしながら、ここにはある非対称性^⑧が隠されている。たしかにマルクスは、全般的な過剰生産としての恐慌にたいして、危機という呼び名をあたえていた。だが、じつは、買うこと^⑨の困難のなかには、売ることの困難のたんなる裏返しにとどまらない困難^⑩、恐慌^⑪という意味での危機以上の危機をはらんでしまう可能性があるのである。インフレ的な熱狂がさらなる熱狂をよび、物価と賃金が加速度的に高騰^⑫していくハイパー・インフレーションとよばれる事態にまで進展したとき、それまで貨幣として流通していた金属のかげらや紙のきれはしや電磁氣的な^⑬パルスがそのまま貨幣として流通しつづけていくことが困難となる転機がとつぜんおとずれる。貨幣が貨幣であることが困難になるといつてもよいだろう。それは同時に、貨幣の媒介によってその統一性が維持^⑭されてき

た商品世界が、モノのたんなる寄せ集めの状態へとひきもどされてしまう、商品世界そのものの解体の可能性を意味することになるのである。

買うということの困難がはらむ商品世界そのものの解体の可能性——われわれの目的は、まさにこの恐慌^⑮という意味での危機以上に危機的な危機のあり方について考えてみることである。だが、そのためにはいささかの準備がいる。

ひとつの市場を考えてみよう。そこでは、どの商品も、ひとつ何円という価格が書きこまれた値札とともに登場する。(ここでは、多くの生産物のように、商品の価格はその売り手が設定するという仮定をしている。)もちろん、人間が舞台に登場した後の世界では、商品はそのままではたんなるモノである。商品にどのように立派な値札がつけられているようにも、それは、財布^⑯のなかに貨幣をもっている他の人間によって買われなければ、価値のない手としての商品となることができないのである。

だが、商品の値札に書きこまれた価格は、市場の需給^⑰にかんする売り手の期待にもとづいた主観的な評価でしかない。主観^Iはあくまでも主観である。それが買い手の需要を売り手の供給とちよūd等しくさせる価格であるという客観的な保証はどこにも存在していない。あるいは、マルクス流にいいかえれば、それが商品の生産のための社会的必要労働時間を正確に反映しているという客観的な保証はどこにも存在していない。買い手が財布から貨幣をだしてじつさいに商品を買ってくれること^{II}によって、はじめて売り手の主観的な評価としての商品の価格が客観的な判定をうけることになるのである。もちろん、買い手の心のなかも

財布のなかも、あらかじめ見ておくことは不可能である。

(3) 見るまえに跳ばなくてはならない。商品を売るとは、それゆえ、マルクスにならって茶化していえば、商品に「Salo mortale（とんぼ返り）」、直訳すれば「命がけの跳躍」を強いることなのである。「この跳躍に失敗すれば、商品にとっては痛くないが、商品所有者にとってはたしかに痛い」。値札に書きこまれた価格が高すぎれば商品は売れ残ってしまう、低すぎれば品切れになってしまう。

だが、もし売ることの困難がこのような主観的な期待の危うさによるものだけだとしたら、それは市場における価格の調整によって容易に解決されてしまうはずである。なぜならば、痛さは最良の教師であるからである。じつさい商品が売れ残れば、売り手は供給を減らして価格を切り下げるだろう。商品が品切れになれば、売り手は供給を増やして価格を引き上げるだろう。売り手は失敗から学ぶのである。もちろん、価格が下がれば、買い手の需要は増えるだろうし、価格が上がれば、買い手の需要は減るだろう。すなわち、本来的に主観的な商品の価格も、売れ残りがあれば切り下げ、品切れになれば引き上げるといふ調整のくりかえしによって、市場において「客観的に訂正され」てしまうのである。それは、他の事情が一定であるかぎり、需要と供給とを客観的に一致させる均衡価格にむかって動いていくことになるはずである。

それゆえ、ここで、ひとはただちにつきぎのような結論に跳躍したい衝動にかられてしまうだろう。命がけであるべき商品の跳躍も、市場における価格の調整という手助けがあれば、結局は安全な日々の歩みと変わらないものになってしまう、と。主観が客観になってしまうのである。

(4) だが、跳ぶまえに見なければならぬ。たしかに、ひとつの市場だけ

を見ているかぎり、価格の調整は需要と供給とを自動的に均衡させていくように見える。しかしながら、資本主義社会のなかにおいては、ひとつの市場は孤立して存在しているのではない。それはほかのすべての市場とともに、価格を通じておたがいに依存しあう膨大にひろがった網の目を形成しているのである。ひとつの市場における価格の変化は、ほかのすべての市場の需給に影響をあたえ、そこでの価格の変化を誘発してしまう。ほかのすべての市場における価格の変化は、今度はずとの市場の需給に影響をあたえかえし、その市場においてさらなる価格の変化をうながすことになる。市場と市場とのあいだの相互依存の網の目は、それぞれの市場の内部での価格の調整による均衡化への傾向にたいして、なんらかの干渉作用をおよぼしてしまうのである。全体は部分のたんなる総和ではなく、他の事情はけつして一定ではないのである。それゆえ、ひとつの市場のなかでの商品の跳躍だけをながめていてもしょうがない。すべての市場で無数におこなわれる商品の跳躍を、同時に見ておかなければならないのである。そうしてはじめて、それらがほんとうに命がけのものかどうかを確かめることができるはずである。

(岩井克人「貨幣論」による)

〔注〕 マルクス——十九世紀ドイツの経済学者・哲学者。

愚昧——知識程度が低く、ものの道理が分からない様子。

『資本論』——マルクスの著作。

アイデア——観念・理念。

バルス——瞬間的に切れたり流れたりして続く電流。

〔問1〕⁽¹⁾ だが、この無限の循環運動のどこかに狂いが生じたとき、はじ

めてその存在の歴史性が意識されることになるのである。とあるが、「その存在の歴史性が意識されることになる」とは、どうい

うことか。次のうちから最も適切なものを選べ。
ア 貨幣を用いた商品世界は奇跡的に誕生したと言われているが、人々の日常の売り買いを絶えず支えるものとして、人類の歴史を生み出したと意識されるようになること。

イ 貨幣を用いた商品世界は人類の記憶も定かではない太古の時代に生まれたという点で、人間の歴史の中で途方もなく大きな意義をもつものだと意識されるようになること。

ウ 貨幣を用いた商品世界は人間の歴史の中で生まれたものであって、いずれはその存続が危うくなったり、消滅してしまうこともあるものだと意識されるようになること。

エ 貨幣を用いた商品世界は太古の時代から売りと買いが繰り返されることで存在し続けてきたが、いずれそれが消え去ることは歴史の必然であると意識されるようになること。

〔問2〕⁽²⁾ 恐慌という意味での危機以上の危機とは、どういうものか。

その内容を簡潔に表した箇所(十字以上十五字以内)を探し、初めの五字を書け。

〔問3〕 本文の内容について述べたものとして適切なものを、次のうち

から選べ。
A 欲望の二重の一致とは、マルクスの言葉でいう「局地的で原生的」で「先祖伝来」の「社会的な物質代謝」、つまり、いわゆる物々交換に至る互いの欲望の一致を指す。

B 「奇跡」は日々くりかえされなければならないとは、生活の基盤となる「貨幣」が生まれるという「奇跡」が、世界の様々な場所で次から次へと起こってきたことを指す。

C ある非対称性が隠されているとは、売ることの困難の方が、買うことの困難に比べて社会の経済状況の変化による影響をはるかに受けやすいという特徴をもつことを指す。

D それらがほんとうに命がけのものかどうかを確かめることができるとは、複数の市場に注目することで、売りに携わる人々の真剣度を計り比べられることを指す。

〔問4〕⁽³⁾ 見るまえに跳ばなくてはならない。⁽⁴⁾ だが、跳ぶまえに見なければならぬ。とあるが、

① 「跳ぶ」とは、誰がどうすることをたとえたものか。次のように説明するとき、

に入る適切な言葉を書いて文を完成させよ。なお、

は三字の言葉を本文の傍線部(3)より前から抜き出して書き、
B は適切な言葉を十字以上十六字以内で書け。

A が、 B こと。

② 傍線部(3)と傍線部(4)は矛盾しているように見えるが、実は矛盾はしていない。その理由を次の [] のように説明するとき、 [] に十字以上十五字以内の適切な言葉を書いて文を完成させよ。

傍線部(3)と傍線部(4)では、 [] から。

〔問5〕 I 主観はあくまでも主観である。 II 買い物手が財布から貨幣をだしてじつさいに商品を買ってくれることによって、はじめて売り手の主観的な評価としての商品の価格が客観的な判定をうけることになるのである。とあるが、商品の売買についてのこと以外で、「主観的な評価」が「客観的な判定をうける」ということ具体例を、あなたの体験や見聞に基づいて挙げ、それについて感じたことや考えたことを含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や」などもそれぞれ一字と数えよ。

4

次の【I】の文章とそれに関連する注釈【II】・【III】を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに

〔注〕がある。）

【I】

古典の文章や詩歌を読もうとする時、私たちは、日頃どのような手段を取っているだろうか。

原文が入っている全集や文庫本によって読もうとする場合が最も多いかもしれない。あるいは、名場面や名歌・名句を選んで解説してあるものをひもとくこともあるだろう。

原文だけを読めば、ほぼ意味がわかるという人もいれば、ことばの意味が注記されている部分（「語釈」と言う）に目を転じないとわからないという人もいるだろうし、現代語訳を読んで初めてわかったという人もいるはずだ。最初から現代語訳だけを読む人もいるだろう。そもそも現代語訳しか載っていない本もある。

古典の文章や詩歌を読むことを職業としている私も、原文をさつと読んで意味を取れることもあれば、いくつかのことばの意味がわからなくて、その部分の語釈を参照する場合もあり、また現代語訳を読んで確認しないとわからないという場合もある。

ところで、そのように原文・語釈・現代語訳などが備わる、古典読解に関する便利な書物（雑誌類に掲載される場合もある）を総称して、注釈と言う。

(1) 注釈の具体例をふたつ挙げてみよう。

次に掲げるのは、個人的に愛着のある『徒然草』三十一段の全文である。

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがり言ふべき事ありて文を
やるとて、雪のこと何ともいはざりし返事に、「この雪いかゞ見る
と、一筆のたまはせぬほどの、ひがくしからん人のおほせらるゝ
事、聞きいるべきかは。返々口をしき御心なり」と言ひたりし
こそ、をかしかりしか。

今は亡き人なれば、かばかりの事も忘れがたし。

雪が趣深く降った朝、ある人のもとへ用事があつて手紙を送ったところ、雪のことには何も触れなかった。すると、その返事に、「この雪をどのようにご覧になりましたかと、一言もおっしゃらないような情趣を解さない人の仰せになることを、どうして聞き入れることができましょうか。とてもできません。本当に情けない御心です」と言ってきたのは、おもしろいことだった。今はもう亡くなった方なので、これくらいのことでも忘れがたいのである。

たぶん年上の、親しい感情を抱いている相手との、淡くて、優美で、あたたかい心の交わりが描かれている。そんなところに憧れて、私はこの話が好きなのだ。

冒頭の問題意識に戻って、この原文をながめてみると、一読していただきたいの意味がわかるという人も多いかもしれない。そもそも有名な段な

ので、もともと知っているという人も一定数いるだろう。

ただ、人によっては、「人のがり」とか「ひがくしからん人」でつまずいてしまうかもしれない。古文を読み慣れていないと「かは」が反語だと気付かないかもしれない。

それに対して、次のような語釈が付いたらどうだろうか。日本古典文学大系の『方丈記 徒然草』という注釈にある、本文の上に掲げられている注（「頭注」と言う）のすべてである。

人のがり……ある人のもとへ。

文……手紙。

いはざりし返事に……言つてやらなかった返事に。

一筆のたまはせぬほどの……一言もおっしゃらないほどの。

ひがくしからん人……つむじまがりて、物の趣もわからない人。

聞きいるべきかは……聞き入れるべきであろうか。カハは反語の助詞。

口をしき……情ない。

これだけ注記してもらえれば、格段にわかりやすくなる。

では次に挙げる芭蕉の句はどうだろう。意味がすぐに取れるだろうか。

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

蝸壺に捕らえられてゐる蝸は、明日は引き上げられてしまう運命とも知らず、はかない夢を結んでいる。空では、明けやすい夏の空にかつた月があたりを照らしている。蝸のむなしい運命と、醒めれば消えてしまう夢のはかなさ、そして夏の夜の短さとが重なり合つて、さまざまはかなさが実感される。そして、捕らえられてしまう蝸がどことなく笑いをも醸し出す。おかしみの中に哀れさを誘う印象的な句なのである。そして、「はかなき夢を夏の月」という屈曲した表現が印象の強さを増さしめている。

これも一読して意味が取れる人もいれば、そうでない人もいるだろう。『徒然草』と同じく、日本古典文学大系の『芭蕉句集』の頭注を引こう。

元禄元年。○明石夜泊―四月二十日、實際は須磨に泊つている。↓
書簡一九。○蝸壺―蝸を捕える素焼の壺。縄で繋ぎ合わせ、昼の中に海底に沈めておいて、翌早朝に引き上げる。蝸が岩穴と間違えて壺に入っているのを引き上げて捕えるのである。○短夜の夏の月が照らす海底で、蝸は既に捕えられていても知らず、蝸壺の底にへばりついて、はかない夢を結んでいるだろうの意。

なるほど、これだけ情報があれば、この句についての理解がぐんと深まる。「明石夜泊」とあるものの、実際は須磨に泊まっていることが、同じ古典大系の『芭蕉文集』に載っている書簡によってわかるとされる。つまり、明石に泊まって句を作ったというのは虚構なのだ。「蝸壺」の解説も明解で、よくわかる。そして、最後に句の意味が丁寧に説明さ

れてあつて、理解が助けられる。

もう少しことばを補つた鑑賞ということだと、以下に挙げる日本古典文学全集『松尾芭蕉集』のようなものがあり、さらに深く句の味わいを知ることができる。

ここ明石の浦に船繋りして、旅寝の楫枕に通う客愁と懐旧の情を侘びていると、明けやすい夏の月はもう中空にあつて、この世のものならぬ蒼白い光を投げかけ、海原一面に夢幻の趣を添えている。聞けばこの静かな海の底で、蝸は明日の生命も知らず、人の沈めた蝸壺の中に、はかない夢を結んでいるという。明石といい、蝸壺といい、はたまた夏の夜の夢といい、まこと夢幻泡影の夜泊の感懐である。「明石夜泊」という前書は、「楓橋夜泊」（張継）などの詩題になつたものであり、旅懐の中にすでに人生仮泊の憂愁を言いこめてあるとみられる。『源氏物語』『平家物語』等に縁の深い明石に、蝸壺のはかなさを見つけたところが俳諧の新しみであるが、その滑稽な蝸壺を、夢という一字を媒介にして明けやすい夏の月に結びつけ、一句をおもしろうてやがて悲しき夜泊の哀愁にまじめあげたところが非凡。季語は「夏の月」。

以上のように、さまざまな注釈によって、古典への理解が高まることは、多くの人々が経験するところではないか。

（鈴木健一「古典注釈入門」による）

【Ⅱ】

「をかし」の注……興味ふかい、おもしろいという意味だが、「あはれ」が対象を主観的に賞美するさまを表すのと異なり、知性や批判意識がはたらく。

(鑑賞日本古典文学「方丈記・徒然草」による)

【Ⅲ】

本段の表現の重心は、「返事」の文面に現われている、純粹に、率直に、自分を非難した、「亡き人」の性格にある。手紙・書簡というものは、多くの場合、筆者その人の面目を露呈し、読者その人に直接に迫ってくるものであって、その点からいえば、劇や雄弁と同じ方向に立つ表現形態といえることができるのであるが、ここでも、「聞き入るべきかは」と、断乎として拒否し、「返すぐく口をしき御心なり」と思いきって非難しているところに、思いつめた、いちずな、それだけに純真な個性が発揮されていたのを、兼好は「忘れがたし」と愛惜しているのである。

(安良岡康作「徒然草全注釈」による)

〔注〕夜泊——夜、船をとめてその中で泊まること。

船繋り——船をつなぎとめること。

楫枕——船の旅。

客愁——旅先で感じるわびしい気持ち。

侘びて——心細く感じて。

夢幻泡影——人生のはかないこと。

張繼——中国、唐の詩人。「楓橋夜泊」の作者。

旅懷——旅情。

人生仮泊——人の世は無常であるということ。

憂愁——うれいと哀しみ。

露呈——隠れているものを外にあらわしだすこと。

断乎——考えをきっぱりと決め、その通りにする様子。

愛惜——過ぎ去ったことに心ひかれて惜しむこと。

〔問1〕⁽¹⁾ 注釈の具体例をふたつ挙げてみよう。とあるが、その意図を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア まず、注釈が相互に補完し合うことを示し、次に、同じ作品であっても語意の選び方で異なった内容となる注釈を示すことで、解釈には

様々な可能性があることを示そうとしている。

イ まず、語釈が全くない場合にはある程度の理解も不可能であることを示し、次に、語の意味だけではなく鑑賞も加えることで、含みの多

い作品も情景が理解できることを示そうとしている。

ウ まず、親しみやすい作品であれば語釈がなくてもそれなりに理解は

可能であることを示し、次に、難解な作品には言葉の意味のみならず、場面を説明した鑑賞文も必要であることを示そうとしている。

エ まず、語釈があることによって文意が捉えやすくなることを示し、

次に、語釈に加えて鑑賞を含んだ注釈を読むことで作品の奥深い背景を知り、理解を深めることができることを示そうとしている。

〔問2〕⁽²⁾ 聞きいるべきかは。の意味内容として最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア 聞き入れるのは当然です。
- イ 聞き入れることはできません。
- ウ 聞き入れることはないでしょう。
- エ 聞き入れることになるでしょう。

〔問3〕 文中の〓を付けた「れる・られる」のうち、他の三つと異なる意味のものとはどれか。

- ア 本文の上に掲げられて^アいる注
- イ 蝸壺に捕らえられて^イいる蝸
- ウ ささままなはかなさが実感^ウされる。
- エ 書簡によってわかると^エされる。

〔問4〕 次に挙げるのは、⁽³⁾かばかりの事も忘れがたし。をめぐって生徒と先生が交わした授業中の会話である。(①)・(②)に入る最も適切な語句を、【Ⅰ】又は【Ⅲ】から抜き出して書け。なお、字数は()内の指示に従うこと。

生徒A 『徒然草』のこの段を初めて読みました。現代語訳もあるとしても分かりやすくなりますね。でも、「人」は作者を「ひがくしからん人」「口をしき」といって非難していると思うけれど、それなのにどうして作者は「忘れがたし」といっているのですか。

先生 そうですね。では、もう少し別の注釈も見てみましょう。

生徒B 【Ⅱ】の注釈を見ると「をかし」は知性や批判意識がはたらいた表現だとありますね。

先生 そうですね。【Ⅲ】の注釈では、どうですか。

生徒B 手紙には書いた人のありようが投影されるとありますね。

生徒C そうですね。手紙の文面に、自分を非難した人の「(①)五字」が表れていたのを「愛惜^{あいせき}」しているのですね。

生徒A そうか。だから【Ⅰ】の文章で、この段には「(②)十八字」が描かれているとあるのですね。よく分かりました。

生徒C いくつかの注釈を読んで納得がいきました。なるほど、作品も注釈もおもしろいものですね。

〔問5〕「はかなき夢を夏の月」という屈曲した表現の説明として最も

適切なものは、次のうちではどれか。

ア 「夢を」に対しては、本来なら「結ぶ」あるいは「見る」などと続くはずの動詞が省略され、「夢を」とは直接には関わりのない「夏の月」と詠みつなぐことで、印象深いものとしている。

イ 無限に広がりながらも所詮は消えてしまう「夢」を、たとえ短くても現実に夜空にかかる「夏の月」と対比させることによって、「夢」の悲哀感を引き立てる効果が生み出されている。

ウ 「夏の月」が「はかなき夢」を結ぶという、現実にはありえない変わった構図を倒置法によって示すことで、月が美しくても夏の夜はすぐに明けてしまうという物足りなさを強調している。

エ 夜が明ければ生け捕られてしまうのに「夢を」「見る」「蛸」の哀れな姿を、さえずえと輝く「夏の月」が見守るといふ表現方法で、月をまるで慈悲深い存在であるかのように描き出している。

〔問6〕次に挙げるのは、芭蕉の「蛸壺やはかなき夢を夏の月」の句に

ついての生徒の言葉である。この中で、本文の内容を適切に理解した発言はどれか。

ア 生徒A はじめは「蛸壺」と「夢」と「月」と無関係な語が並んでいるだけのように思えたけれど、本文の説明を読んでどれも「はかなき」でつながり合って、この夜が特別に無常であることを表しているとても悲しい作品だと分かった。

イ 生徒B 「明石夜泊」とあるけれど、どの注釈を見ても、芭蕉は「明石」には泊まっていけないことが分かる。「奥の細道」の勉強をしたとき、虚構を交えて作品世界を作っていると習ったけれど、それと同じことが言えておもしろい。

ウ 生徒C なぜ「明石」なのか分からなかったが、「明石」が古典作品に縁が深い場所で、作品に日本文学の伝統の世界を入れていることや、使っている言葉がどれも伝統的な優雅な世界を表している言葉だということが、注釈を読んで分かった。

エ 生徒D はじめは「蛸壺」と「夢」の組み合わせが唐突に感じられた。けれど注釈を読んで、この作品は日本の古典だけではなく中国の詩の影響も受けていることや、言葉の結びつきが新鮮で俳諧のおもしろみのある作品だと分かって興味深い。

3
寺

園

五
日